



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

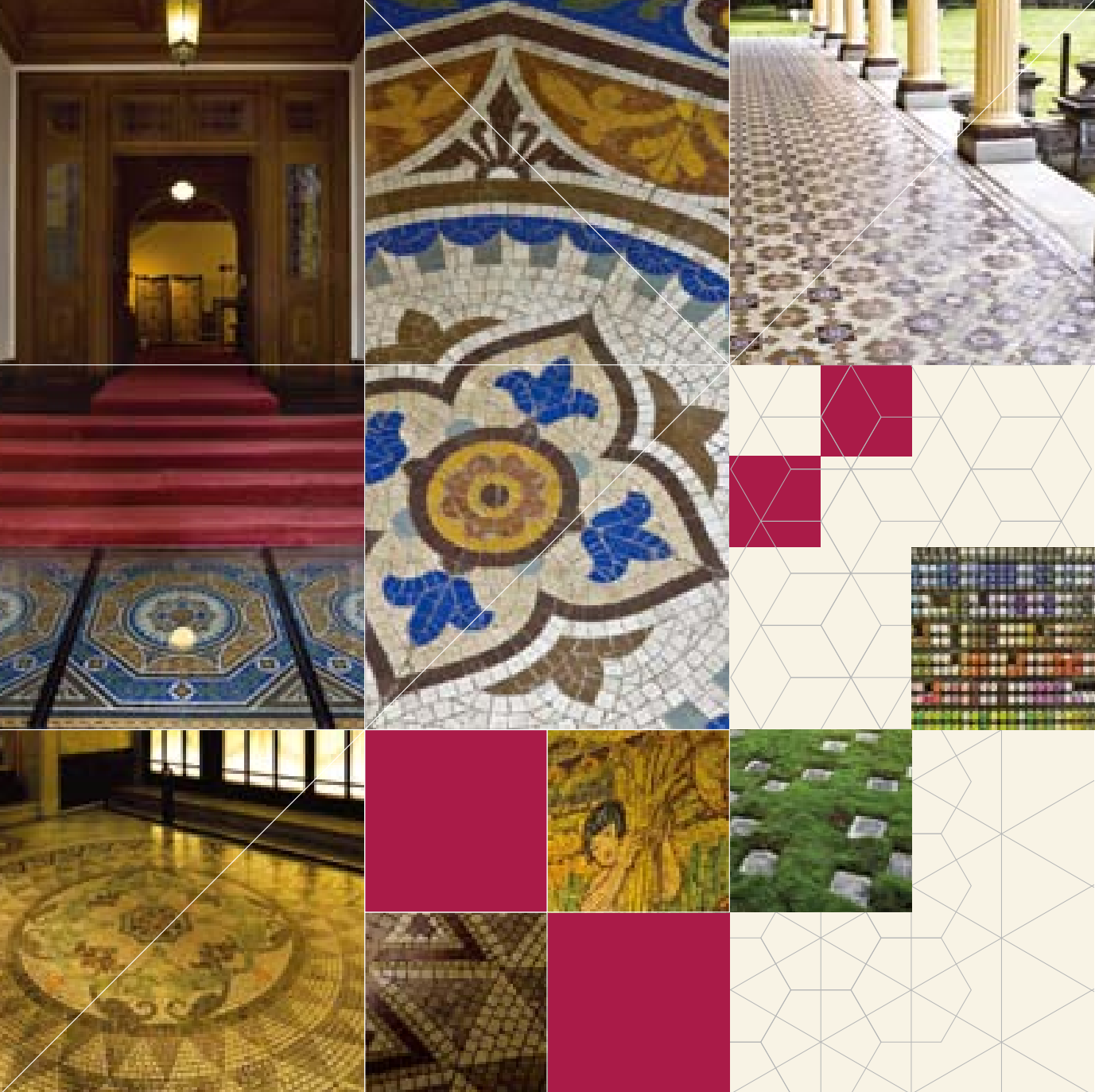
# NEWS LETTER

特集

## モザイク、遥かな旅

vol. 10 | 季刊 2009 冬





## 【特集】モザイク、遥かな旅

薄暗い教会やモスクのなかで、きらきらと輝くモザイク画。古代オリエントで誕生し、ローマ、ビザンティン、西アジアへと広がりながら、人々を魅了し続けてきました。いつしか「モザイク」は、細かな粒子が集まった視覚的なイメージを表すようになり、さらには、日常、耳にする言葉として私たちの身の回りにあります。「モザイク」へのさまざまな想いを、旅するように、描き出していきます。

## 【特集】モザイク、遥かな旅

- 02 モザイクで読み解く、都市 陣内秀信さん
- 04 モザイク創世記、そして未来 工藤晴也さん
- 06 左官職人  
久住有生さんが、  
東京国立博物館のモザイク壁を再現します。

### LIVE REPORT

- 07 開催報告  
土壌採取&モノリス製作ワークショップ  
「自分でつくろう!土壌モノリス」  
  
焼き物の街・常滑 1963-64年シリーズより  
山田脩二の写真・軌跡展&トーク

### LIVE SCHEDULE

- 08 これからの催し

# CONTENTS

INAXライブミュージアム  
NEWS LETTER

vol. 10 | 季刊 冬  
2009

表紙写真  
地中海で紀元前から栽培されていたオリーブ。夏に咲いていた香りのいい小さな花が、みごとな実にな。軽やかなシルバーリーフが、晩秋の光を浴びて揺れていました。  
(2008.11.14)  
表紙撮影：加藤弘一

常滑から\*

9

### 常滑で生まれたスクラッチタイル



民家のスクラッチタイル張の塀

常滑市内の路地裏を歩くと、コンクリートの塀に張られたスクラッチタイルをここかしこに見ることが出来ます。文字どおり、表面を釘で引っ掻いてつくったタイルで、その国産品の第1号はF・L・ライトの設計による帝国ホテル旧本館(大正12年竣工)だと言われています。帝国ホテルは焼くと淡い黄褐色になる粘土が知多半島にあることをつき止め、その粘土を使って、常滑に興したホテル直営の工場でつくりました。

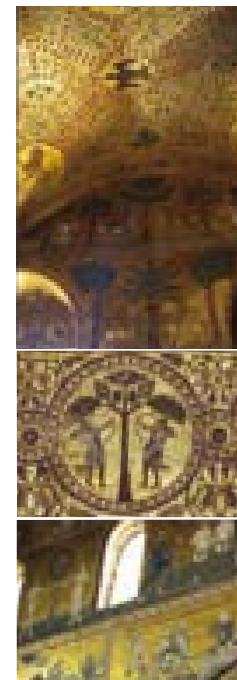
このスクラッチタイルは常滑でつくられて以来、昭和初期には大流行して、多くの著名なビル外壁に張られました。釘で引っ掻かれて動いた土の粒は、炎でその瞬間を固められ、炎が揺らいだそのままに色も微妙に揺らいでいます。そんな静と動の織りなす造形美が魅力的です。



帝国ホテル旧本館のタイル張柱

竹多 格 (主任学芸員)

\* INAXが生まれ育った常滑のやきものや土に関わる人、風景、できごとなどを、INAXライブミュージアムのスタッフが伝えます。



上)パレルモ王宮 ルッジェーロの間  
中)パレルモ王宮 ジェーザ  
(ノルマン王朝夏の宮殿)  
下)モンレアレのドゥオモ(大聖堂)  
南イタリア、シチリアには州都パレルモをはじめ各地に、11世紀頃からつくられたロマネスク様式の聖堂が残る。金色に輝くモザイクはビザンティンの影響を物語る。

陣内  
JINNAI  
Hidenobu  
秀信



法政大学建築学科教授。1947年生まれ。東京大学大学院工学系研究科修了。工学博士。学生時代3年間イタリア政府給費留学生としてヴェネツィア建築大学等に留学、それを契機にイタリア、地中海都市そして東京など、どのように都市空間が成立しているのか現地調査をもとにした研究を続ける。主な著書に「ヴェネツィア 水上の迷宮都市」「イタリア小さなまちの底力」(講談社)ほか多数。2008年度サルデーニャ建築賞受賞。

## モザイクで読み解く、都市

ヴェネツィアで、  
都市を読み解く

私が大学で建築を学んでいたのは、1970年代初め。あらゆる分野で既成の価値観や学問の体系が大きく動いた時期だった。進歩の理想を掲げて実現してきた近代の建築都市が行き詰まり、新たな道を真剣に探し始めた頃、「東京は面白くない。」直観的にそう感じた私は、研究対象としてイタリアを選んだ。以降、イタリア、ヴェネツィアとのつきあいは、40年近くになる。

イタリアの街は、華麗な歴史を今にそのまま伝えていく。しかし、そうした歴史だけでなく、むしろ都市空間そのものに、私たちの感覚に語りかけ、身体を興奮させてくれる魅力がある。古代、中世、ルネッサンス、バロック、近代そして現代と都市が重なっているイタリアでは、表側だけ見ても意味がない。都市を剥がしその構造を読み解く、ことの大切さ、建築や都市の特徴を経済や文化の交流の中で見ることの重要性も、イタリアから学んだ。

おもしろくて味わい深い  
中世初期のモザイク

そんなイタリアの各地で、さまざまなモザイクに出会った。私の心に残るのは、古代ローマ時代の名残りのある中世初期のおおらかで豊かな表情のモザイク。職人が楽しみながら張っていた姿が浮かぶような、つくりに手がこもったものたちだ。

南イタリアのトラニーでは、ロマネスク様式の教会の内陣の床に、アダムとイブの楽園の追放の場面が、ちょっと稚拙だけれど、おおらかに描かれていた。同じく南イタリアのオートラントという街の教会には、床一面、旧約聖書のさまざまな物語や、移りゆく季節と働く農民の姿が描かれていた。素朴な暮らしの中で、神を敬い、生きる喜びを得る。当時の人たちは、字が読めなくてもモザイク画を見ることで共同体の良き構成員としての自覚に目覚めたのだろう。

モザイクはやがて、東方のビザンティン世界で独特のスタイルを生みながら発達し、その影響を受けたラヴエンナ、ヴェネツィア、シチリアにモザイクが発展した。シチリア州の州都パレルモ近郊にあるモンレアレのドゥオモは、大空間の隅から隅まで金のモザイクで覆われ、建物に入った瞬間感動する。これがモザイクの力と云えるのかもしれない。

モザイクの意味から、  
都市を俯瞰する

モザイクとは、いろいろな要素が合わさって全体を構成している状態を言う。だから、イタリアは国自体がモザイクだ。独自の魅力を放つ小さな街がちこちこちにある。魅力的なモザイクは、部分部分に魂がこもっている。一つひとつの粒が発信する色合いや風味、それらが醸し出す形。それをつないでいくことで、意味を生み、見る人に感動を与えることができる。

だから、都市もそうあってほしいと思う。近代の合理主義によって、全体のシステムの中に無理やり統合するのではなく、ちがう個性を持っている地域を、土地の面白さを、活かしつつ全体のつながりを大切に、そんな、効率追求の発想をくつがえす都市の在り方がどこかで生まれてきたらいい。

モザイクというものを、そんなふうに文化論的に、哲学的にとらえ、解き明かしていくのも面白い。(談)

オートラントの教会の床面に描かれたモザイク画  
1163年に聖母のオートラント司教の命を受けたハンズレオーネ神父により制作されたもの。  
「生命の木」をモチーフに作られている。

©Tomoyuki SUZUKI \*オートラントは、南イタリア州トラパニー州の自治体である。人口5000人ほど。

# 工藤晴也さんに聞く モザイク創世記、 そして未来

機能性から発生した  
「石で絵を描く」技法

モザイク(Mosaic)はギリシア語のムーサイ(Musai)という音楽や詩を司る女神たちの名称が語源\*1。音楽(Music)とモザイク(Mosaic)のスペルが近いのは、同じ言葉から派生しているからです。モザイクはさまざまな色の断片を、音楽はさまざまな音の断片を組み合わせて表現する。両者に垣根はなく、すべて神に捧げる芸術的な行為だと。モザイクという言葉からは、おらかな時代が思い浮かびます。

モザイクはメソポタミア文明の頃からあると言われていますが、テッセラ(断片)を組み合わせてつくるようになったのはギリシア時代。この時代のモザイクは素晴らしい。テッセラは精巧に四角く割ってあり、緻密で写実的です。その技術をローマが受け継いで発展していきまし

た。当時のモザイクは床に施されました。石で絵をつくるという技法は、踏んでも雨がかわつても壊れないという機能性から発生してきたのです。

壁にまでモザイクがつけられるようになったのは、4世紀にローマがキリスト教を公認して以降。廟、教会堂、洗礼堂などがどんどんつくられるようになって、壁にも神の世界を再現していったのです。信仰心の厚さを示すと同時に布教の有効な手段でありました。その頃から、金箔を挟み込んだガラスやズマルトという色ガラスが主に使われるようになります。

## 建築装飾の要素としてのモザイク

日本にモザイクが入ってきたのは文明開化の頃、西洋建築に付随する装飾の一つとして取り入れられたと想像できます。大理石を使った床モザイクは国会議事堂や東京国立博物館表慶

館、赤坂の迎賓館などにあります。単純な幾何学模様を大理石で並べた簡単な表現ですが、技法的にはちゃんとしたモザイク。日本人には当時できる人がなくて、フランスの専門家を呼んできてつくらせたという資料が残っています。

ライオン銀座7丁目店の壁画モザイクはこれらと趣を異にして、ヨーロッパの教会建築の影響を受けた表現技法になっています。建築家・菅原栄蔵\*2)が独学でモザイクの勉強をして、自分の事務所の人たちが4、5人でつくったらしい。ズマルトは、大塚喜蔵\*3)が初めて日本で焼いたものです。ヨーロッパのモザイクに比べると粗さはありますが、本物を見ないであそこまでやったのは素晴らしいし、シャンデリアの光を効果的に応用した表現が成立しています。

大正、昭和の日本のモザイクは、装飾的な植物パターンや幾何学的なものが多い。芸術家の作品というよりも、建築の装飾の一部として職人がつくった。そういう意味では、日本の伝統的な建築スタイルだと言えます。

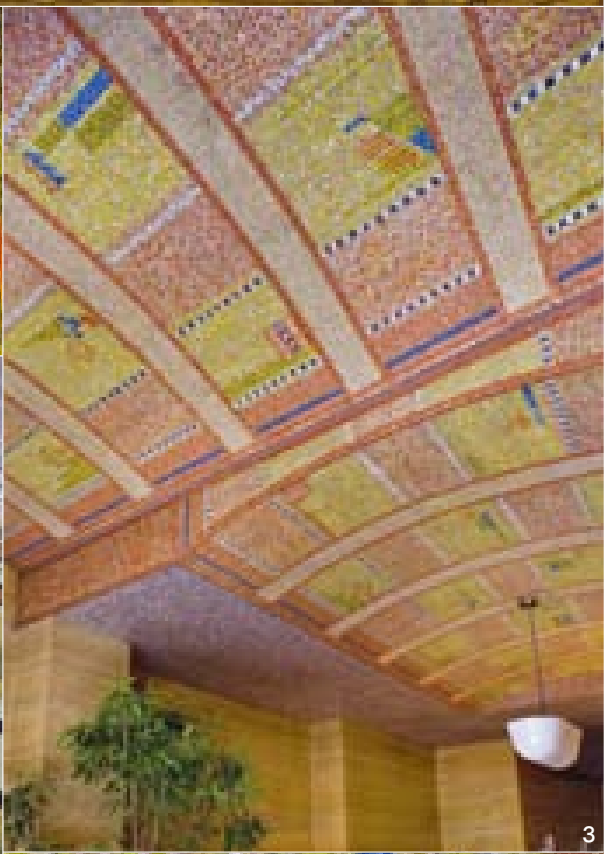
昔から、日本には建物に素晴らしい木彫りや漆喰細工の装飾などがなされています。それ

は職人の素晴らしい技が前面に出て建築物として成り立っているんですね。モザイクも、そういう装飾の要素として日本人は考えてきたのだと思います。

## 自由な発想と感性でつくる新しいモザイク

ヨーロッパのモザイク作家たちは、モザイクの伝統を非常に大事にしています。伝統の中から新たな組立てをし直しているようなところがあって、私の力ではとても及ばない。しかし、彼らから見ると日本人の作家の作品は面白い。私の仕事がヨーロッパの人たちから評価されるのも、自分たちになにもを感じるからでしょう。彼らと全く感性が違う日本人的なデリカシーと、伝統に縛られない新鮮なもの。日本人は海外のものをよく学んで、自分たち流にする感性があります。自由にモザイクというものを解釈して、自由な発想で自分の感性を活かしたモザイクをつくっていきたくですね。

1)後にミュージアム(Musee)。文芸、音楽、天文など知的な活動を司る女神たち。  
2)画才に恵まれ、旧新橋演舞場、駒澤大学図書館など独自の様式で一世を風靡した。  
3)ビヤホルのために自分で窯をつくり、研究を重ねて250種のズマルトを焼いた。



テッセラをたくさん集めて図柄を表現するモザイク。そこで重要なのは「光と影」だ。材料の質感、肌合い——キラキラした微妙な光の乱反射と影、そして「谷間」である目地が一つの平面を形づくる。

### 1.2.ライオン銀座7丁目店

豊かな色彩で、黄昏の空を背景にした妻の収穫を描く。肩から腕へのしなやかな流れ、麦穂の束を抱える背中の丸み、豊かな乳房、服のしわなどに、目地の流れが読める。昭和9(1934)年竣工。

### 3.4.近三ビル

建築家・村野藤吾のデビュー作。ドイツから輸入したガラスモザイクの華麗な天井は、美術学校出身の奥村新太郎のデザイン。昭和6(1931)年竣工。

### 5.東京国立博物館表慶館

設計は、イギリス人建築家J. コンドルの弟子で迎賓館なども手がけた宮廷建築家の片山東熊。床のモザイクはフランス人の技師を招いてつくった。明治41(1908)年竣工。

## 工藤 晴也

KUDO Haruya



壁画家、東京藝術大学美術学部准教授、国際現代モザイク作家協会(AIMC)会員。御所御浴堂モザイク、横浜市上郷ふれあいの里「森の家」エントランスホールモザイク(薫る大地)、JR郡山駅地下歩道モザイク(PHYSICAL BALANCE)、取手競輪場特別観覧席エントランスホールモザイク(利根悠久)など作品多数。古代ローマ時代のコッチョペストというモザイク表現の研究を続け、現代に復活させた。イタリア・ラヴェンナのユネスコ世界文化遺産ガッラ・ブラチディア廟モザイク(5世紀前半)の保存修復も手がける。

# 左官職人 久住有生さんが、 東京国立博物館のモザイク壁を再現します。

次回企画展「ゆらぎ モザイク考—一粒子の日本美—」では、  
東京国立博物館本館ラウンジの  
モザイクタイル空間を会場に再現します。  
その制作を手がける久住さんにお聞きしました。



東京国立博物館本館ラウンジのモザイク壁



「実際に東京国立博物館のモザイク壁をご覧になって、いかがでしたか。」

久住 何人かの職人が入っていて、一般の人が見たら平面に見えるかもしれないけれど、高さが3、4ミリ違う場所もあります。ただポイントになる部分一開口部の周りなどは、すごくきれいに収めてある。こ

れは職人の見せ方上手。全部がキッチリしているんじゃないくて、パツと見た時にきれいに見えるのが一番いい。それを知っている職人の仕事かなと思いました。

そして意匠的に見せているけれど、それをあまり主張しない「引き際」の良さ。すごく考えて手間ひまかけていながら、自分は脇役だってわかっている。そういうのが日本的な美なのかな。

タイルが外れているところが1カ所あって、その跡を見たらきれいなアールなんです。釉薬のかかったタイルの角が表にピシッと出るように、割った後に裏の角を砥石か何かで削ったんでしょう。小さな破片一つひとつに、ものすごく細かい細工がしてあった。日本人ばいなあと思えました。たぶん職人は、この壁が永久に残るだろうと考えていたと思います。今は、5年か10年で内装を変えてしまいますからね。

一同じ模様でも、よく見るとタイルの色や形、数も違ってきます。

久住 きつと、現場の職人がタイルを割りながら張っていったと思うんです。日本の職人の考え方なのか、ディテールにこだわって、四角じゃなくて台形に割ったりね。かけらの大小の組み合わせなんかが、僕らにはすごく気になります。

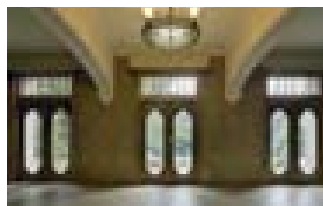
一施工方法もわかるんですか。

久住 先に収縮率の少ない石膏など、固まるのが速いものでタイルを張りつけて下地をつくって、それから目地に漆喰を塗って掻き落としてパターンをつけて、最後に目地にペンキを塗ったんじゃないかと。試作してみないとわかりませんが。

一今回の再現について。

久住 壁との会話じゃないけど、自分なりに考えて、ものをつくるのってすごく良い形だと思ふ。昔の職人さんの考えていたことがわかったり、面白いことがいっぱいあると思って、楽しみにしています。

久住有生 KUSUMI Naoki  
1972年淡路島生まれ。3歳から鑲をにぎる。18歳から各地へ修行に出て、さまざまな親方から左官技術を学ぶ。1995年久住有生左官を開業。ドイツ、フランスなど、海外で経験を積む。1997年、京都へ改めて修行に出て、日本の文化財建築の現場で腕を磨く。高い左官技術と独創的なアイデアで建築に新風を吹き込み、大きな評価を得ている。INAXライブミュージアム「土・どろんこ館」の壁も手がけた。



東京国立博物館

1872(明治5)年に創設された日本最古の博物館。日本と東洋の文化財の収集保管、展示、調査研究などを目的としている。本館、表慶館、東洋館、平成館、法隆寺宝物館からなる。本館(J.コンドル設計)は関東大震災(1923)で被災。帝冠様式の代表的建築とされる現在の復興本館は1938(昭和13)年に開館した。設計は渡辺仁(公募)。「旧東京帝室博物館本館」の名称で2001年重要文化財に指定。